

### 現代フランス社会学の研究 1990年代以降の理論展開

Un essai sur la Sociologie française contemporaine :  
le développement dans les années 1990-2003

杉山 光信

SUGIYAMA Mitsunobu

この研究は1990年以降におけるフランスの社会学者たちの間でみられる新しい研究動向をその背景とともに跡づけ、その意味を考えるものである。第1年目にはアラン・トゥーレーヌを中心とする社会学者たちの新しい社会運動論がフェミニズム、エコロジズム、レジオナリズムなどいわゆる新しい社会運動の退潮のなかでどのように変化を遂げたかを検討した。

新しい社会運動の退潮はフランスではまた労働組合運動、従来型の政党政治、あるいはカトリック教会などの退潮とともに論じられ、それと反比例する形でNPO・NGO、ボランティア活動、アソシアションなどの活発化が注目されている。パリ政治学院のCEVIPOFに拠る政治学者たちがこれを市民の政治参加の新しい形態ではないかと論じていることは昨年の実績報告書でふれたとおりである。

第2年目の研究においてはアソシアション、ボランティア活動、NPO・NGOの活発化の研究を追っているこ

とでは変化はないが、少し視点を変え贈与論ないし贈与経済についての研究の新展開を追いかけてみた。これら活動の活発化（あるいは活発化させる必要）が語られるのは最近10年間ないし20年間の先進国経済の急速な変化と深くかかわることはしばしば指摘されるとおりである。戦後の経済成長の終焉は大量生産・大量消費のフォーディズム体制の終焉であった。経済的に豊かになった市民たちの移り変わりやすい嗜好にあわせ素早く生産システムを組み替える必要、あるいはグローバル化の進展のなかで追いつける中進国との競争で生き残るために、ポスト・フォーディズムとして先進国の企業でとられているのは、勤労市民を高度な能力をもつ部分とそうでない部分に区分し、前者だけを企業の正規なパーマナントなメンバーとし、後者はパートや派遣社員など非正規なメンバーとする方向であった。こうして勤労市民の間に新しい亀裂が生まれ、後者は失業の不安にたえず脅かされ、前者の間でも競争が激化している。こうしたことすべてが社会のなかでの人と人のつながりを希薄にし、世の中の雰囲気殺伐たるものになっている。

この個人化の進行と連帯の希薄化は今日では先進国に共通する問題であり、合衆国ではバットナムを初めとする研究者たちにソーシャル・キャピタル論として展開されている。具体的な取り組みはさまざまな形で始められているが、市民間での連帯の回復、コミュニティ再生の試みの一つとしてエコ・マネー（地域通貨）があるが、エコマネーの考え方の基礎ないし背景には贈与経済論が存在している。

今日私たちのもとで一般化している市場経済は、アダム・スミスによれば未開社会での個人と個人の交換から発展してきたとされるのだが、人類学者たちはこれは事実とちがうという。未開社会ではどこでも贈与経済が支配的なのであった。フランスの社会学者マルセル・モースはこのことを1922年の『贈与論』で示し、贈り物をプレゼントすることは自発的なことだが、何らかの返礼の期待ないし義務がかならずともなっていると指摘した。

この論点は重要である。市場での貨幣による売り買いは等価による交換であるゆえに1回の行為で完結する。贈与によるやりとりは等価による交換でないが、交換という機能のほかに信用、同盟、調停、はては威信をめぐる競争にいたるまでさまざまな含みをもっている。それゆえここから限りなく社会関係が紡ぎ出されるのである。まさしくこの点が今日のボランティア活動、アソシアション、NPO・NGO論での中心テーマとなっているのである。フランスでは社会学者のアラン・カイエの指導する研究グループ（CRIDA）が精力的な研究を進め『贈与の精神』（2000）、『アソシアション、民主主義およ

び市民社会』(2001)などを発表し、贈与論が社会科学において今日支配的な方法的個人主義よりも有効なパラダイムとなることを示した。またマルク・アンスパックは『一方が他日同様のことをするという条件で 互酬性の原初形態』(2002)で、正の贈与にたいして負の贈与としての復讐が同様な構造にあることを示し、その循環から逃れることが非常に困難であることを示すとともに、今日合衆国で広まりつつある、これから築く家庭内での家事分担を契約書にしたうえで一緒にするという結婚の形式が、かえってカップルの共同生活を破綻させることになりがちであるという逆説を説明している。

贈与論ないし贈与経済論はこのように今日喫緊の課題となっている人と人とのつながり、市民的連帯の回復をいかにして実現するかを考えるにさいして多くの示唆を与えるものとなっている。また歴史家のナタリー・デーヴィス『16世紀フランスにおける贈与』(2000)は、この視点が過去の歴史を振り返るときにも思いがけない発見をもたらしてくれることを示している。宗教改革期の人々にとって予定説にもとづく禁欲と献身は、この世と自身をつくってくれた(これも贈与)神にたいする人間の側からからの返礼として当時は考えられていたという。ナタリー・デーヴィスによると16世紀フランスの人々の生活をみだしていた贈与システムの解体は資本主義の発達にともなう市場システムの浸透の結果などではなく、むしろ政治権力の集中にともなう強制のせいであった。このように贈与論ないし贈与経済をテーマとするフランスでの研究は現代日本社会を考えるさいにも多くの示唆を与えてくれる。

#### \* 参考文献

- ・ Alain Caille, *Anthropologie du don, Le Tier Paradigme.*, Desclee de Brouwer, 2000.
- ・ Alain Caille et al., *Association, democratie et societe civile.*, La Decouverte, 2001.
- ・ Mark Rogin Anspach, *A Chearge de Revanche. Figures elementaires de la reciprocite, du Seuil*, 2002.
- ・ Natalie Z. Davis, *The Gift in Sixteenth-Century France.* The University of Wisconsin Press. 2000.